

ラーフルの『放浪学』

田 中 敏 雄

ラーフルの『自伝』——ヒンディー文学史の資料として——に続いて、ここでは、ラーフルの『放浪学』¹⁾を紹介することとしたい。ラーフルの生涯と旅は不可分のものであり、ラーフルの著作は、ラーフルの人間に対する深い関心と旅によって成立している、と思えるからである。

旅に憧れる若者たちからの質問、問い合わせに、いちいち返事を書くよりも1冊の本にしよう、と思い立つたことからこの書は生れた²⁾。カリンボンでの当時の日課³⁾からすると、夕食後の団欒に続く就寝までの約2時間を、小説『甘い夢』⁴⁾の口述にあてていたことから、この書の口述もこの時間帯に行われたのであろう。期間は、1949年6月15日から30日までであり、毎日1章ずつという、この著者にしては珍しいまでのゆつくりしたペース、寛いだ雰囲気で行われたものと想像される。

初版は15章、再版で1章追加され16章より成るこの書は、内容的に7部に大別されよう。以下、括弧内は頁数を示すこととする。

1. 放浪とはなにかが1章で扱われている。「この世界で最高のものはといえば放浪であり、個人と社会にとつて有益なものは放浪をおいてほかはない」(1)、「動くことは人間の人間たることであり、これを放棄したものは人間たりえない」(8)、と述べ、人類の歴史の原動力となつた集団あるいは個人による移動、放浪を語り、インド思想史をブッダ、マハーヴィーラ、シャンカラ、ラーマーナンダ、グル・ナーナク、ダヤーナンドらの遍歴、放浪から説明する。そして、少年時代の著者にとつて呪文であつたウルドゥー語の詩句、「世界を巡る旅に出よ、怠情な生活ありえない 怠情な生活続いたら いまの若さはありえない」⁵⁾、を引用し

1) *Ghumakkar śāstra*, Dillī, Rājkamal Prakāśan, 1949; 2nd, 57; 3rd, 67.

2) *Meri jīvan yātrā*, Vol. 4, Dillī, Rājkamal Prakāśan, 1967, p. 339.

3) 同掲書: 329.

4) *Madhur svapn*, Kalkattā, Ādhunik Pustak Bhavan, 1950; 2nd, Dillī, Rājpal & Sons, 1967.

5) *Meri jīvan yātrā*, Vol. 1, Kalkattā, Ādhunik Pustak Bhavan, 1944; 2nd, 1951, p. 30.

て若者たちを放浪に誘う。

2. 2章は、鎖を断ち切れ。縛り付けられたままでは、¹「人間から動物ではなく植物の位に落ちること」(13)を意味する。縛り付ける強い鎖として、母親、父親、妻子を挙げ、特に、母親の愛情と涙は強力であるとするが、「マリーデーヴィーの息子ブッダ、スヴァルナークシーの息子アシヴァゴーシャは、それぞれ母親の名を不滅にしたではないか」(15)、と説得する。

3. 3章、学問と年齢、4章、自立、5章、技芸と芸術、11章、地理学、13章、記録、の各章で放浪への準備を説く。家出、放浪の年齢は、16歳から23、4歳までで、「20歳が理想的である」(29) 150～200冊の旅行記を読破し、言語を習得し、地理、歴史、宗教など多面にわたる知識を獲得し、かつ、身体を鍛えなければならない。「卑屈にさえならなければ乞食は許されるが、仏教諸国以外では避けるべき」(41)であり、このために自立が必要となる。理髪・美容術、大工、鍛冶、金細工、時計・電気修理、写真技術などは、学業と並行して容易に習得できるものである。「占星、手相は人の弱みにつけこむもので避けたほうが望ましい」(48) 救急手当の知識は不可欠で、「放浪者が簡単な治療手当を心得ておくことは、ほかでもない、自分自身の心の痛みを除くために必要なのである」(49) 民謡、民俗舞踊は人々の心理的障壁を一瞬にして突き崩すものであり、これらに通じた放浪者はいたるところで歓迎されよう。携帯の便からすると、「竹笛は放浪者にとって理想的な楽器である」(54) こうして、放浪者は、「自尊心」(40)を失うことなく、「親愛感」(39)を持つて同胞に接することができるのである。

4. 放浪の対象地域は外国だけとは限らない。6章で、インドの辺境地帯を挙げ、これらの地域における西欧の学者たちによる調査研究を批判し、インドの若者たちがこの分野に目を向けるように、と訴える。7章で、ヨーロッパのジプシー、北インドの放浪部族スイルキーワラー (Sirkivāla)、チベットとインドを往来するカンパー (Khampā) 部族を紹介する。

5. 放浪者はさまざまな障害に直面しなければならない。9章では宗教が扱われる。チベットに入り、サンスクリット文献翻訳に生涯を終えたスマリティジニャーナキールティ (Smṛtijñānakīrti, 11c.) を想い、著者がヒンドゥー修業僧として放浪中、イスラームのスーフィー行者とも交遊があつたことを回顧し、放浪と宗教は相反するものではない、とする。10章では恋愛が問題とされている。放浪者をこの問題から守るものは、「羞恥と躊躇」(105)である。かりに男女が結

ばれてしまつたら、「4本の脚以上にはしてはならない」(106) 子供をもうけた時から、放浪者は放浪者でありえなくなるのである。12章では死の問題が取り上げられている。放浪の目的は、「人々のため、人類の幸福のため」(133)であり、このために、放浪者たちは波を立てるのである。波は消える。しかし、いつかは大きな波となるのである。死に打ち勝つことは死を恐れないことである。

6. 女性の放浪者は男性の放浪者以上に多くの困難に直面しなければならない。8章で、著者は子供の頃聞いた話を紹介する。人のいないある町の宮殿に女性の屍体が横たわっていた。屍体は腐爛していず、全身に針が刺っていた。針が抜かれると女性の意識は回復し、最後に、目に刺っていた針が除かれると、女は目を開けて、ずいぶん長いこと寝ていた、と語つた。女性、特に、インドの女性の立場はまさにこの状態である。間違つても、「男が針を抜いてくれるなどと期待してはならない」(87) 再版で追加された15章で、女性放浪者は3人で行動を共にするように、と忠告する。

7. 放浪は無目的でよいのか、という問いを14章で出す。「放浪こそが手段であり目的でもある。無目的であろうが、目的を持とうが、究極的には意義あるものなのである」(154) 16章で、放浪者は、出合つた人々との触れ合いを大切に、「感謝の念を絶えず持ち、表わし、記録に残し、長く心に留めるべきである」(164)、との結論を出す。

この書が口述される約6ヶ月ほど前に、雑誌の依頼に応じて一文を寄せ、自らを「退役の放浪者」と規定し、「インドの若者たちすべてを放浪者にしたい、幾千の母親父親たちの呪いと涙の雨や暴風雨をこの身で受けたい、民族の興隆に放浪者たちは大いに貢献しているし、それ以上に、放浪は、宗教、民族、国境、時代を越えるものだからである」⁶⁾、として4人の放浪者たちの生涯を紹介している。これは、この書の第1, 2章の内容と一致するものであり、この書の「予告文」としてよいであろう。

この書と『自伝』を読み合わせると、この書は著者自身の体験に基づいていることが明らかになる。むしろ、『自伝』に触れられていない、政治と恋愛に挫折し自殺した若者を悼むことば(6章)などがあり、また、放浪者としての自己を見た時の自省のことばすらある。たとえば、家出、放浪の年齢を「20歳が理想

6) “Ghumakkaṇṇam kāmā samāgamam,” *Pratik* 9, p. 9.

的」としたのは、14歳の頃から家出、放浪を繰り返えし、正規の学校教育は中等教育までであつた著者自身の深い後悔の念からであろう。「放浪者が簡単な治療手当を心得ておくことは、ほかでもない、自分自身の心の痛みを除くために必要なのである」、としたのは、治療手当を受けられずに死んで行つた修業僧や、チベット、ネパール、インド西北国境地方などで出合つた病める人々を、痛みを持つて思い出したためであろう。この書は、旅に憧れる若者たちへの回答書としてではなく、『自伝』を補完する内容を持つてゐるのである。

ラフルによる旅行記⁷⁾、地誌⁸⁾は、放浪者としての義務を自ら果たした証とすることができよう。放浪者へのラフルの共感、伝記⁹⁾を書かせ、小説¹⁰⁾の主人公を、南インド、セイロン、ヒマラヤ地方へと放浪させる。ディグナーガ(Di-gnāga, 陳那, 400-480頃)とダルマキールティ(Dharmakīrti, 法称, 650頃)に対する関心から、チベットへの文献探索旅行は4次にも及び、その成果¹¹⁾や、ラサ滞在中、モンゴル僧からボルジュヴィキの動向を聞き取つて執筆した啓蒙書¹²⁾などは放浪の副産物としてよいであろう。この書はラフルの生涯と著作への解説書としての役割をも果しているのである。

「予告文」にある「退役した放浪者」に注目すれば、この書は独立インドの若い世代へ託す、「退役放浪者」のメッセージもあつたのである。

7) ラフルの旅行記、紀行文はほとんど『自伝』に収録されている。以下、書名に目を通すだけで、ラフルが関心を寄せた地域が分るであろう。『私のチベット旅行』(*Meri Tibbat yātrā*, 1934); 『チベット滞在15ヶ月』(*Tibbat mem savā varṣ*, 1934); 『セイロン』(*Laṅkā*, 1935); 『私のヨーロッパ旅行』(*Meri Yūrop yātrā*, 1935); 朝鮮、満州紀行をも収めた『日本』(*Jāpān*, 1936); 『イラン』(*Īrān*, 1937); 『私のラッターク旅行』(*Meri Laddakh yātrā*, 1939); ヒマラヤ地方旅行を収めた『キンナル地方』(*Kinnar deś*, 1948); 第2次チベット旅行をも含む『アジアの奥地』(*Ēśiyā ke durgam bhūkhaṇḍom mem*, 1956); 『自伝』の第3巻となつた『ロシア滞在25ヶ月』(*Rūs mem paccts varṣ*, 1952); 第3回チベット旅行、ラージャスターン紀行を収めた『旅の頁』(*Yātrā ke paṇne*, 1952); 『中国でなにを見たか』(*Cīn mem kyā dekha*, 1960)。

8) 『ダージリン案内』(*Dajiling paricay*, 1950)のほか5点ある。

9) 聞き取りに基づくものとして、『スワミー・ハリシヤラナーナンド伝』(*Ghumak-kaṛ Svāmī* 1958)など4点ある。

10) 『ヨウデーヤ部族のジャヤ』(*Jaya Yaudheya*, 1944); 『將軍スインハ』(*Siṃha Senā-pati*, 1942)など。

11) 『ブラマナーヴァールティカ』(*Pramāṇavārttika*) 関係文献3点のほかに、刊行された校訂、翻訳は10点あり、未整理の写本も多いと聞く。

12) *Sāmyavād hi kyoṃ*, 1934。